

日本文学の翻訳

— 三島由紀夫『春の雪』の中国語訳について —

廖 建 宏

二つの中国語テキスト

文学作品の翻訳の場合は、普通の文章翻訳とは違って、翻訳者は卓越した語学力の持ち主であるのみでなく、文字に潜んでいる文化的要素についても読み取る能力が必要である。それは日本語と英語のような差異性の大きい言語の場合にだけに必要なものではなく、日本語と中国語、いわゆる同じ漢字文化圏における言語でも、要求されるものである。ここでは、日本語から中国語への翻訳によって生じた問題を、三島由紀夫（1925-1970）の『春の雪』という作品の中国語訳を一つの例として考えてみることにする。

ところで、たとえ同じ中国語でも、言語に対する意識は50年近くの隔たりによって、中国と台湾、二つの中国人社会には全く違う様相が呈させられている。両方ともに公用語として北京語（中国では『普通話』、台湾では『国語』と称す）が使われているが、互いに交流のない長い歳月を経て、それぞれ違う特徴を持つようになったと思われる。共産党政権が主導権を握り、すべては社会主義優先の「普通話」では、共産主義らしいプロレタリア用語が氾濫し、理論的になる一方、言葉の柔軟性自体が失われつつある傾向が見られる。これに対し、台湾の「国語」には50年間の日本統治によって多くの日本語が取り入れられた。また戦後の自由なアメリカ精神が社会の主流となって、ぎごちない文章や表現に対し、強い抵抗感を持つようになってきたのである。さらに、単語や文章の表記についても、時代の風潮から受けた影響や国家政策によって異なっている。したがって、同じ文章であっても、「普通話」と「国語」、それぞれの持つ特性によって、異なる印象を読者に伝えることになると考えられる。それゆえ、ここでは二つの中国語テキストを使用することになる。「普通話」の方は、中国社会科学院研究員の葉渭渠氏の監修で、夫人で同じく中国社会科学院研究員である唐月梅氏が訳した『春雪』（以下は唐訳とする）である。そして「国語」の方は、日本留学経験者で文学専攻の蕭照芳・陳系美両氏の監修で、出版社専属の翻訳家である邱夢蕾氏の『春雪』（以下は邱訳とする）を使う。両方とも専門的であると思われるメンバーが参与してい

たし、しかも最近に出版されたばかりなもので（唐訳は1995年で邱訳は1994年）、ある程度の代表性がある中国語テキストと言えよう。なお、二つの中国語テキストの相違について、参考として本稿の最後に簡単な付図を付けることとした。

直訳と意識

それでは、まずは文章の形式や翻訳に対する翻訳者の態度についてから検討してみよう。唐訳は横書きであるが、段落の分け方は会話の部分を除き（会話については後で触れる）、ほぼ日本語テキストに忠実である。一方、邱訳も段落の分け方には、ほぼ日本語テキストに即しているし、しかも縦書きを採用している。また、邱訳が佐伯彰一氏の書いた新潮文庫版「解説」まで訳し、しかもテキストの最後に収録した点から考えれば、邱訳は新潮文庫版の『春の雪』を藍本として利用したと考えられる。中国では1960年代の文化大革命以降、横書きのスタイルが全面的に推進され、文学作品でも横書きが正式的なスタイルとして認められているので、横書きの形式を採ったのであろう。一方、台湾では自然科学と社会科学系の書籍ならば横書きで、人文科学系の文章は漢文学の伝統である縦書きにすることは既に社会全般の慣習として定着していたので、このような形式となっていると考えられる。

では、実際に日本語テキストから文章を引いて、それに対応する訳文を見てみよう。

それは時間の結晶体の美しい断面が、角度を変えて、六年後にその至上の光彩を、ありありと目に見せたかのようなだった。聡子は春の翳りがちな日ざしの中で、ゆらめくように笑うとみると、美しい手がすばやく白く弓なりに昇ってきて、その口もとを隠した。彼女の細身は、一つの弦楽のように鳴り響いていた。[下線筆者、三島、1996 : 134-135]

いまの箇所に対応する部分の中国語訳をあげる。

這是時間結晶體的美麗的斷面、它彷彿改變角度、讓自己在六年後清楚地看到它最美的光彩。他看到聰子的笑影、在春天不時陰暗下來的陽光中蕩漾；那雙美麗的手、恍如白色的弓、敏捷地舉到唇邊、將嘴角遮住了。她那婀娜的身姿、猶如一首弦樂響徹四方。（これは時間結晶體的美麗的斷面であり、まるで角度を変えて、六年後はっきりとその最も美しい光彩を自分に見せたかのようなだった。彼は春の翳りがちな日ざしの中で、ゆらめくように笑う聡子の笑顔を見た。その美しい手がすばやく白い弓のように唇のもとに挙げられてきて、口もとを隠した。彼女の穏やかで美しい姿が、

まるで一曲の弦楽のように四方に鳴り響いていた。) [下線筆者、唐、1995: 136、引用は旧漢字に変更、日本語訳は筆者訳]

那經過時間結晶の美麗側面、即使角度改變、六年之後、那至高無上的光彩依然清晰地呈現在眼前、聰子在柔和的春日下洋溢著微笑、美麗的手敏捷地舉起、像白色的弓、遮住嘴角。她苗條的身影如同一首正在演奏的弦樂。(その時間の結晶した美麗な横顔は、たとえ角度が変わっても、六年後にその至上の光彩も依然はっきりと目の前に呈していた。聰子は穏やかな春の日の中で愛嬌溢れるばかりであり、美しい手がすばやく挙げてきて、まるで白い弓のように口もとを隠した。彼女の細い面影は、まるで演奏されている一曲の弦楽のようだった。) [下線筆者、邱、1994: 127、日本語訳は筆者訳]

下線の引いた所を見れば分かるように、三島の書いた「時間の結晶体の美しい断面」という非常に分かりにくい文章が中国語テキストでは「時間結晶體的美麗的断面」(時間結晶體的美麗的断面)と「經過時間結晶の美麗側面」(時間の結晶した美麗な横顔)に訳されている。問題なのは、「時間の結晶体の美しい断面」とは、いったい何であろうか、ということであろう。単なる語彙の面から見れば全く見当が付かないほど意味不明ではあるが、この文章の前の段落で「池から体をめぐらす聰子の顔が」[三島、1996: 134]という言葉がある点から考えれば、「時間の結晶体の美しい断面」とは、恐らくは「年月を経て成長してきた聰子の美しい横顔」を指すのではないかと思われる。とすれば、日本語テキストのままに訳した「時間結晶體的美麗的断面」(時間結晶體的美麗的断面)の唐訳は確かに原文を尊重していると言えるが、日本語テキストの持つメッセージが果たして中国語読者に伝えられるかどうかはまた別の問題が生じる。これに対し、「經過時間結晶の美麗側面」(時間の結晶を経た美麗な横顔)と訳した邱訳の方は、「結晶体」という名詞を取って「結晶した」のように動詞に変え、推測でありながらも「断面」の本意である「横顔」に形容させる形を採っている。言い換えれば、邱訳の方は直訳ではなく、前後の文脈から「時間の結晶体の美しい断面」の持つメタファーを意識で処理しているのである。これは原文尊重ではないかもしれないが、唐訳と比べれば、中国語読者にとって非常に分かりやすい訳文であると言えよう。そのうえ、中国語の感覚としても唐訳の方はやや固く、訳文の流麗さが犠牲にされたのではないかと感じさせないでもない。そして邱訳の方は自然な文章で読みやすく、洗練された中国語であると言って良いが、精確な翻訳概念を持つテキストである、と見做すことはできないだろう。

さらに、もう一カ所を例として見てみよう。

祖母は郷里の者が来ると、誰憚らぬ鹿児島弁で話したが、清顕の母や清顕には、多少楷書風なぎこちなさのある東京弁、それも「が」の鼻濁音を欠いているために一そう武張ってきこえる言葉で話した。それをきくと、清顕は、祖母がことさらそのような訛りを保つことによって、彼が難なく発する東京風の鼻濁音の軽薄さを、それとなく非難しているように感じた。[三島、1996：127]

この箇所訳文は次のようである。

老家一來人、祖母從不忌諱誰、就用鹿児島腔說了起來。而同清顯的母親和清顯談話、她則使用多少帶楷書式的生硬的東京腔、這種腔調在“力”字上缺少鼻音、聽起來更覺得生硬了。聽到祖母這般說話、清顯覺得是祖母有意保持這種腔調的、這無形中斥責了他的輕浮、因為他輕易地發出東京腔的鼻音。(実家から人が来ると、祖母は誰憚らぬ鹿児島弁で話をした。そして清顕の母や清顕には、多少楷書風なぎこちなさのある東京弁を使って話した。それが「力」という字の場合なら鼻濁音を欠いているために、もっと固く聞こえるように感じさせる。それを聞くと、清顕は、祖母がことさらそのような訛りを保つことと感じた。それとなく彼の軽薄さを非難しており、彼は難なく東京風の鼻濁音が発音できるから。) [唐、1995：130、引用は旧漢字に変更、日本語訳は筆者訳]

每逢故郷の親友來訪時、她便肆無忌憚地使用鹿児島の方言交談、而清顯和他母親却已把鄉音忘得一乾二淨、也因此、她老人家更談得益發起勁似地。在清顯聽來、老人家談得這麼有聲有色・洋洋得意、莫非在責怪後輩們忘典背祖吧！(毎回故郷の親友が訪れてくる度に、彼女は誰憚らぬように鹿児島の方言で話をした。清顕と彼の母親は既に故郷の訛りをさっぱり忘れてしまった。それゆえ、《彼女のような》お年寄りには普段よりもっと勢いよく《鹿児島の方言で》話した。それを聞くと、お年寄りのこんなに生き生きしていながら、調子の良いように話していることは、もしかすると後輩たちが自分の先祖を忘れたことに対する責めることではないかと、清顕は感じた。) [邱、1994：120、日本語訳は筆者訳]

この箇所原文は、日本語の読者にとって別に何の変哲もないかもしれないが、中国語に訳されると、問題が出てくる。それは「楷書風」と「『が』の鼻濁音」の部分で

ある。「楷書風」という言葉自体が分かりにくいものであるが、そのうえ、中国語には「が」という仮名文字はないので、どういうふうに訳されるのが翻訳者の能力や判断だけに任せるしかない。唐訳の場合、原文の「楷書風」をそのまま漢字の「楷書風」とされているが、これは、いったい訳されたのかどうだろうか、という疑問を抱かせる処理である。しかも単なる「楷書風」という漢字からは、中国語読者は意味を全く掴むことができない。さらにまた、「が」という仮名文字を一番似ている漢字の「力」に訳したが、中国語読者は恐らく、どうして主人公の祖母が話した東京弁では「力」という字の鼻濁音を欠いているのか、全く理解できないであろう。それゆえ、たとえ文章全体は原文に近い形を採っているとは言え、ある程度の説明や補足がないと、日本語テキストのメッセージを読者に伝えることができなくなる恐れがある。「これこそ翻訳だ！ これこそ外国文学を味わうのだ！」という意見も出てくるかもしれないが、訳文の自然さを無視し、ひたすら原文に拘る翻訳は真の翻訳とは言い難く、読者にいやな後味を与える翻訳であると言わざるを得ない。

他方、邱訳の場合では、肝心の部分、つまり原文の「清頭の母や清頭には、多少楷書風なぎこちなさのある東京弁、それも『が』の鼻濁音を欠いているために一そう武張ってきこえる言葉で話した。」という文章はほとんど訳出されていないし、「彼が難なく発する東京風の鼻濁音の軽薄さを、それとなく非難しているように感じた」という部分も「莫非在責怪後輩們忘典背祖吧！」（もしかすると後輩たちが自分の先祖を忘れたことに対する責めることではないかと）のように改訳されている。この段落は清頭の祖母の鹿兒島弁と東京弁についての話である。多少訳しにくいが一番重要な部分を省略し、また部分的とは言え、説明の補足であるならばともかく、このような形での改訳は適当であるとは言いにくい。そうした翻訳は、これが三島由紀夫の作品の翻訳と言えるだろうかという疑問を読者に起こさせるだろう。

それでは、なぜ邱夢蕾氏はそうした訳をしたのであろうか。それは単なる「楷書風」と「『が』の鼻濁音」が中国語に訳せないという単純な理由ではないだろう。その程度の訳しにくさならば、多少補足の形で説明を入れたり、また脚注を付けたりすれば処理できるはずなのである。邱訳は全体としてみれば、自然な中国語で読みやすい文章であると前にも述べたが、その代わりに、一つ一つの段落で、省略されたりまた改訳されたりしている部分は唐訳よりもはるかに多い。その理由を特定することはできないが、推測することはできるだろう。今現在の台湾の出版業界では原作者を重視している一方、翻訳者はあまり高い評価を得られない。したがって、文筆活動をしている人間にとって翻訳家よりは作家になった方がいいのは現状であり、高いレベルの翻訳家を求めるのは困難なことである。そのために、精確な翻訳のできる高度な技術を持

つ翻訳家は台湾では限りなく少ないのである。ところで、優れた語学力を持つ学者や大学の教員たちが翻訳活動に力を注いで立派な翻訳書籍を出版することは外国ではよくあるが、台湾ではまだ少ない。何故かと言えば、「翻訳」すること自体が未だに「研究業績」として台湾の教育部（文部省相当）に認められていないので、毎年「研究業績」や学生の教育に追われている彼らは自然に翻訳活動から身を引いてしまったわけである。また、これは推測だが、一段落一段落の細かい原文尊重による生み出した読みにくい翻訳よりは、多少変更があっても自然で、すらすらと読みやすい翻訳のほうは台湾の読者に好かれているらしい。これは日本語の文学作品のみでなく、翻訳された外国語の書籍全般についてこのような傾向が見られる。もちろん、もしこの邱夢蕾氏のテキスト改変が以上の理由によるのだとしても、それが、翻訳者自身の能力や日本語テキストの文学精神に対する配慮をしたうえで変更だったのか、それとも台湾の読者の好みに合わせるために出版社側に要求されたのかは明らかにできない。しかし、邱訳の改変について論じるときには、一つの原因として考えても良からう。

符号・記号の変更

前述のような文章形式や翻訳に対する態度などの点から見ると、唐訳は「原文尊重主義」で邱訳は「訳文尊重主義」に近い形を採っていることが分かった。それは単なる翻訳者の判断によるものだけではなく、それぞれの持つ文章観とそれぞれの中国語読者の翻訳テキストへの期待の相違という点にもよるのだと考えられる。

では、符号・記号についても検証してみよう。まず、次のような文章を引く。

さて、侯爵様が興味を催おされて、
『教育方針とは一体何だね』
と仰言ったところ、お姫様は、
『清様から伺ったところでは、お父様が実地教育を遊ばして、清様を花柳界へお連れになり、それで清様は遊びをお覚えになって、これで一人前の男になったと威張っておいでですが、小父様はそんなに不道德な実地教育を本当に遊ばすのでございますか』
と、まことに言いにくいことを、あの調子ですらすらとお訊きになったそうであります。[三島、1996：153]

この箇所に対応する中国語訳は次のようである。

“于是、侯爵興致勃勃地說：

“‘所謂教育方針是指什麼而言？’

“小姐說：‘據清顯說、叔叔會親自帶他去尋花問柳、進行過實地教育、清顯也就學會玩了、他自認爲已經成了男子漢而盛氣凌人、叔叔真的對他進行過這樣不道德的實地教育了嗎？’

“她就是用這樣的口吻將確實難以啓齒的事、都滔滔不絕地提出來了。

(“ですから、侯爵様が興味を催おされて仰る：

“‘所謂教育方針は何を指す？’

“お嬢様は仰る：‘清頭によれば、叔父様は曾て自ら彼を花柳界へお連れになり、実地教育をなさったので、清頭はこれで遊びをお覚えになった。彼はこれで一人前の男になったと威張っておいでですが、叔父様は本当にそんなに不道德な実地教育を遊ばすのでございますか？’

“彼女はこのような調子で、まことに言いにくいことをすらすらとお訊きになったそうであります。)[唐、1995：152 - 153、引用は旧漢字に変更、日本語訳は筆者訳]

「於是引起侯爵的興趣、他對聰子小姐說：

「『關於我的教育方針、到底指什麼事？』

「聰子小姐說：

「『據清顯說、叔叔親自帶他到花街柳巷去、給予實地教育。因此、他學會了玩女人的一套本領、自認爲是一個大男人、驕傲得不得了、叔叔是不是真的給他這種不道德的實地教育？』

「那麼難以啓齒的話、據說她大方地一口氣說完了。

(「それで侯爵様が興味を催おされて、彼は聡子お嬢様に仰る：

「『わしの教育方針に関して、一体何を指す？』

「聡子お嬢様は仰る：

「『清頭によれば、叔父様は自ら彼を花柳界へお連れになり、実地教育をお与えになったので、女を遊ぶ本領をお覚えになった。一人前の男になったとお思い込みになって威張っておいでですが、叔父様は本当にこんなに不道德な実地教育をお与えになったのでございますか？』

「そんなに言いにくいことを、彼女は憚らずにすらすらと仰言ってしまったそうであります。)[邱、1994：145、日本語訳は筆者訳]

これを読むと分かるように、意味上では唐訳と邱訳の両方とも特に大した問題はないのだが、注目したいのは日本語テキストにおける「」と『』のところである。ここの「」は、よく知られる通り、会話文であることを示すものである。一方、『』はかぎを二重に用いる場合なので、内側のかぎとして使用されている。このような会話の場面であるならば、中国語も同じように、「」と『』で簡単に処理できるが、横書きの場合には、英語の引用符の用法に準じ、「」の代わりに“ ”を、『』の代わりに‘ ’を用いることもできる。特に横書きが既に標準とされていた「普通話」では、横書きの場合でも「」『』を使わず、ダブル・クォーテーション及びクォーテーション・マークを用いることが多い。それにもかかわらず、よく見ると、両方の中国語テキストの各文章の冒頭には必ず“ や「 が付けられている。それは日本語テキストには見られない表記法であり、むしろ欧米圏の言語にはよく見られる手法である。日本語テキストから引いた段落は、主人公清頭の書生である飯沼が自分の聞いた話を清頭に報告する場面である。しかも、その中には清頭の父親松枝侯爵とヒロインである聡子との会話セリフも交じられている。日本語には「敬語」という言語形態があるので、「さて、侯爵様が興味を催おされて、《略》と仰言ったところ」と「と、まことに言いにくいことを、あの調子ですらすらとお訊きになったそうであります」という文章は飯沼の言葉であることを日本語読者は簡単に読み取れるが、中国語に訳す時に、「敬語」の持つ上下関係は完全に消えてしまい、訳し出せなくなったので、もし各文章の冒頭に“ や「 が付けられていないとすれば、中国語読者には、それが飯沼の言葉なのか、それとも地の文なのかは区別しにくく、非常に混乱が起りやすいと思われる。

また、日本語テキストの「侯爵様が興味を催おされて、『教育方針とは一体何だね』と仰言ったところ」に関しても、もしそのままの文章配置を直訳すれば、非常に不自然な中国語になる。日本語の動詞は文章の最後に付くのが普通であるが、動詞が名詞の前に付く中国語にとって、「と仰言った」を後にまわって真ん中に『教育方針とは一体何だね』を置くことは発話者の対象を混乱になりやすい。それゆえ、両方の中国語テキストともに「于是、侯爵興致勃勃地说：」（ですから、侯爵様が興味を催おされて仰言る：）と「於是引起侯爵的兴趣、他對聰子小姐說：」（それで侯爵様が興味を催おされて、彼は聡子お嬢様に仰言る：）のような形を採っている。つまり、「仰言る」（言う）に相当する中国語「説」を前の段落に置いて、さらに：を使うことによって「教育方針とは一体何だね」というセリフは侯爵の言葉であることを明確に示している方法である。そうすれば、自然な中国語にもなったし、そのうえ、長いセリフや複数以上の発話者が同時に登場した場面でも対応ができるようになったのである。

さらに日本語テキストにはよく見かける「……」（リーダー）と「——」（ダッシュ）

記号についても比較してみよう。次のような文章を引く。

(略) こんな応待を誤解した親の外人が山田のところへ抗議に来たが、山田はいずれも煮詰めたような生まじめな顔、妙に恭しい形の唇をした自分の子らを、それと知って、大いに賞めてやった。……

— 山田は一瞬のうちに、こういうことを思い出すと、不如意な足で袴を蹴立てて、悲しげなほど猛然と客の中へ飛び出し、あわただしく客を舞台のほうへ誘導して行った。[三島、1996 : 143 - 144]

中国語の訳文は次のようである。

(略) 孩子們這種待人接物的態度、引起了外籍孩子父母的誤解、向山田提出了抗議、山田看見自己的孩子們那副反正要挨訓的老實面孔、和泯着嘴脣的彬彬有禮的樣子、知道是怎麼回事了、就大大地表揚了他們一番……

……瞬間山田想起了這往事、有點傷心、拂起和服裙袴、不順心地邁開了他的步子、急忙跑到客人中間、趕快把客人請到舞台前面去。

(《略》子供達のこのような人に対する接する態度は、外国人子供達の父母の誤解を引き起こし、山田に抗議を提出した。山田は自分の子供達のどうせ叱られるだろうというような顔と唇を締めて謙遜かつ礼儀正しい様子を見ると、どんな状況なのかは分かって、彼らを大いに賞めてやった……

……瞬間、山田はこの昔のことを思い出し、ちょっぴり悲しみながら袴を持ち上げて、不如意に足を運び出し、急に客の中に走って来て、急いで客を舞台のほうへ誘導して行った。) [唐、1995 : 144、引用は旧漢字に変更、日本語訳は筆者訳]

(略) 外國小孩的父親誤解了、跑來向山田抗議、山田知道後、反而對自己的孩子大大讚賞一番。

山田在這一瞬間、突然想起這樁往事、於是一陣不如意的感覺從中而來、悲憤似地衝進客人之間、慌慌忙忙把客人誘導到舞台前面去。

(《略》外國の子供の父親が誤解したので、山田に抗議をしに走ってきた。それを知った山田は却って自分の子供を大いに賞めてやった。

山田はこの瞬間に、突然この昔のことを思い出したので、ひとしきり不如意の感覚が沸いてきて、悲しげに客のあいだに飛び出し、あわただしく客を舞台のほうへ誘導して行った。) [邱、1994 : 136、日本語訳は筆者訳]

これらを読めば、「原文尊重」の唐訳が正確であるとは言え、非常にややこしく読みにくい訳文であると言わざるを得ない。一方、「訳文尊重」の邱訳がすらすらと読みやすいが、欠落された部分も多い訳文であることは改めて分かっただろう。さらによく見ると、唐訳は「……」（リーダー）記号を訳したが、「——」（ダッシュ）記号を「……」に変更している。他方、邱訳には両方の記号が全く訳されていない。ではなぜ、このような変更が起こったのか。それを説明する前に、まず日本語における「……」と「——」記号の使用法について、次のような説明がある。

……話題をかわす場合に用いられたり、あるいは言葉を言いさして中断する場合や、会話中の沈黙または間を表したりする場合など、文字で説明することが難しい場合に用いられて、文章に余韻をもたせるという効果を生む…… [渡辺・村石・加部、1993 : 591]

もちろん、このほかにも、「——」記号は補助的な説明を文中に入れる場合に用いられたり、「」や『』を用いるに及ばないような語句を目立たせる場合に用いられることもある。また、「……」記号は、会話中の無言を示すだけでなく、語句を省略する場合にも用いられる。

さて、中国語でも上述のように、おおむね日本語と同じような方式で「……」と「——」記号を使用するが、「文章に余韻をもたせるという効果を生む」だけに関しては「……」記号のみ使えることとなる。しかも「——山田は一瞬のうちに」という日本語テキストのように文章の冒頭部に「——」を付ける使用法は中国語では滅多にない。中国語で副題の冒頭として「——」記号を付けることは可能ではあるが、引用した段落の場合では上の文章が下の文章を引き出したと思われる。ならば、上の文章の「……」を使わず、段落を変えずに「——」記号で繋がっていれば自然な中国語の形式となる。もしどうしても段落を変えなければならない場合であるならば、「——」を付けずに、そのまま段落を変えれば良いのであろう。[呂・朱、1952 : 365 - 398 参照] おらそく唐訳が「——」を中国語では「文章に余韻をもたせるという効果を生む」という効果を持つ「……」記号に変更した原因もここにあるのではないだろうか。しかしながら、「……」と「——」記号は文章に余情を持たせたり、補助的な説明をしたりする優れた効果を発揮できる一方、それと同時に、これらは、文脈を中断させてしまうものでもあるので、多用すると、余情や説明どころか文脈が途切れてしまったり、文章の流麗さが破壊されてしまったりする可能性もある。そのために、「訳文尊重」の邱訳は敢え

てそれらの記号を訳せず省略し、あくまでも文章の自然さを追求するのではないかと考えられる（ただし文中の場合では、つまり前後が文章に挟まれるのであるならば日本語テキストのように訳されていたが、文章の『最後』もしくは『冒頭』に出てくる場合ならば、ほとんど省略されていた）。

「水能載舟亦能覆舟」

文章の形式や翻訳に対する態度、さらに符号・記号については上述のように概略の検討をしてきたが、もちろん、取り上げた問題点は氷山の一角に過ぎない。しかし、個人差があるとは言え、唐月梅氏の訳は邱夢薈氏の訳に比べれば、日本語テキストから離れることはずっと少ないと言えるだろう。それは自分たちの文化とは違い、外の文化を伝える器としての翻訳という側面を強調すると同時に、その代わりに読みにくい、中国語としては生硬な表現を生み出すことにもなった。他方、中国語として洗練した表現を生み出した邱夢薈氏の訳は、中国語読者に受け入れやすくなるために、日本語テキストにおける原作者三島の表記法や独特な表現を勝手に削除してしまって、「まともな翻訳テキスト」であるとは言にくい。そのどちらか決定的に良いとは断言できないが、両氏の異なる翻訳概念が生み出した結果はすでに「普通話」と「国語」や「日本語から中国語へ」という単純な言語表現レベルの問題で解決できるものではない。もちろん、翻訳テキストが出版されたときに想定される読者層やそれぞれの中国語読者の好みによって、このような相違のある結果が生み出されたとは考えられるが、文字を通じて異文化理解を実現しようとする場合に、たとえどのような基準に基づいて判断を下したとしても、「原文尊重」や「訳文尊重」のいずれかの結果に導かれてしまうと考えられるのである。

中国語では「水能載舟亦能覆舟」（水よく舟を載せ、また舟を覆す）という言葉がある。それは『荀子』の「王制篇」から取った譬えで、もともとは「君者舟也。庶人者水也。水則載舟水則覆舟」（水はよく舟を浮かべるが、同時にまた舟を転覆させるのもできる。君主は人民によって立つが、また人民によって滅ぼされる）である。とすれば、「原作テキスト舟也。翻訳テキスト水也。水則載舟水則覆舟」のようにも言えるのではなかろうか。冗談ではあるが、イギリス人がよく「私はイギリス人として生まれて来てよかったと思う。何故かと言えば、自分の言葉でシェクスピアの作品が読めるから。」と言っているように、読者の大多数は語学力の欠如のために翻訳テキストを選ばざるを得ないので、「まともな翻訳」でない翻訳テキストによって原作に対する期待や興味が裏切られる恐れがある。換言すれば、原作者が込めた精神が完全に抹殺されてしまうこともあり得るのである。それゆえ、「原文尊重」にしても「訳文尊重」にし

ても、「理解せずに翻訳する」ことは良い翻訳テキストを生み出そうとしている翻訳者ならば決してすべきことではない。原作における単語が本当に何を表そうとしているのか、またそれをどうやって翻訳というフィルターを通して変換するかは、単なる文字レベルで解決するものではないのである。

参考文献

[日本語]

大澤吉博、1997年、「正しい翻訳とは」、川本皓嗣・井上健編『翻訳の方法』、東京大学出版会。

中国語学研究会編、1958年、『中国語学事典』、江南書院。

中国語学研究会編、1969年、『中国語学新辞典』、光生館。

三島由紀夫、1996年、第1刷1977年、『春の雪』、新潮社、新潮文庫。

渡辺富美雄・村石昭三・加部佐助編、1993年、『日本語解釈活用事典』、ぎょうせい出版。

[中国語]

中央人民政府出版総署編、1951年、「標点符号用法」、「人民日報」1951年9月26日号。

呂叔湘・朱德熙編、1952年、『語法修辞講話』、北京・開明書店。

邱夢蕾、1994年、『春雪』、台北・星光出版社。

唐月梅、1995年、『春雪』、北京・作家出版社。

(付図)

訳者	唐月梅（中国）	邱夢薈（台湾）
出版年	1995年	1994年
文章の形式	横書き。段落の分け方は会話の部分を除き、ほぼ原作に忠実。	縦書き。段落の分け方はほぼ原作に忠実。明らかに新潮文庫を利用。
訳し方	直訳に近い	意識に近い
中国語として	固い。読みにくい。	自然で読みやすい。文筆があり、文章は奇麗。
省略の部分	少ない	多い
誤訳	ある（文脈に関する場合が多い）	ある（単語の場合が多い）
外来語	訳されていない場合が多い	ほぼ訳されていた
漢語	原文のままに使われている。もしくは説明を付け加えている。	前後の文脈で省略された場合が多い。
「」の処理	“”と‘’。会話の場面は欧文式で処理されている。	「」と『』。会話の場面は欧文式で処理されている。
……の処理	ほぼ原文のまま	ほぼ省略されていた
—の処理	「……」に訳されていた	すべて省略されていた
『』のない内心語の処理	地の文で処理されている	地の文で処理されている